写真 近代日本文学百年

昭和編

小田切進
紅野敏郎

明治書院

写真 近代日本文学百年　昭和編
定価　1800 円
昭和42年7月15日　印刷
昭和42年7月20日　発行
著　者　小田切進・紅野敏郎
発行者　株式会社　明治書院
代表者　三樹　彰
印刷・製版者　松本印刷株式会社
代表者　松本喜市郎
製　本　誠光社製本印刷株式会社
発行所　株式会社　明治書院
東京都千代田区神田錦町1の16
電話　東京（03）294-5336（代）
<検印廃止>　振替口座　東京4991番

写真 近代日本文学百年 昭和編

小田切進
紅野敏郎

上　「雪国」さし絵　小倉遊亀画

中　「濹東綺譚」さし絵　木村荘八画

下　「いやな感じ」さし絵　朝井閑右衛門画

（小倉・朝井両氏のさし絵は、中央公論社版『日本の文学』より転載）

はじめに

日本文学の長い歴史のなかで、近代百年のうち後半の約五十年、とくに昭和の四十年間にわたる文学の流れは最も複雑多彩かつ豊富な問題をはらんでいる時代である。それは〈二十年戦争〉と呼ばれる長い戦争をはさんで、かつての日本歴史になかった激動の時代であり、文学の歴史もまた最も消長のはげしい困難にみちた時代だった。この本は、すでに半世紀に近い現代文学のその消長の跡を、それぞれの時代・思想・流派・ジャンルの動向を示す種々の写真によってたどりながら、立体的に構成したものである。

わたしは十五年ほど前から、古い雑誌などの写真を機会あるごとにできる限りフィルムにおさめてきた。それらの中には、この四十年余りのあいだに、大震災や戦災にあったため、揃えて保管されているものがなく、〈伝説的な雑誌〉として容易に実物に接することができないものさえあった。マイクロに収めたフィルムは数千枚に達したが、今なお未見の資料がすくなくない。

本書を編むため作年夏からさらに多くの先輩や友人の援助を得て貴重な写真を加え尨大な枚数のなかから九百枚を選んでようやくできあがっただけに、やや大げさな言いかたをすると、この本が編まれるためには非常に多くの人の力と、十五年ほどの歳月をつぎこんだことになる。それにふさわしいできばえになったとは思えないが、近代文学のうち約五十年に近い〈昭和文学〉の歴史がいくぶんなりとも本書によって理解していただければ幸いである。

昭和四十二年五月

小田切進

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

目次

はじめに 6
大正から昭和へ 7
プロレタリア文学の出発
——『種蒔く人』の時代——
関東大震火災と文学者 10
アヴァン－ギャルドの芸術 12
新感覚派の誕生 17
横光利一と川端康成 20
『文芸戦線』の運動 22
青野季吉と葉山嘉樹 24
ラジオ放送はじまる 26
出版革命 27
——円本と文庫本の出現——
空前絶後の同人雑誌時代 28
芥川龍之介の死とその前後 30
ナップ結成前後 34
プロレタリア文学の高揚 36
蔵原惟人と小林多喜二 40
プロレタリア文学の代表的作品 42
『女人芸術』と女流作家の活躍 45
新興芸術派 48
嘉村礒多と井伏鱒二 50
西欧二十世紀文学の移入 52
堀辰雄と横光利一 54
芸術派の新たな結集 57
小林秀雄の登場 58
梶井基次郎と牧野信一 60
満洲事変以後 62
小林多喜二の死 64
プロレタリア文学運動の解体 66
転向文学の時代 68
文芸復興期 72
『行動』の創刊 74
『文学界』の創刊 76
『四季』派の詩人 80
『日本浪曼派』と『人民文庫』 82
昭和十年代の新世代作家 88

大家たちの「昭和」文学 92
島崎藤村 92
永井荷風 94
谷崎潤一郎 95
志賀直哉と武者小路実篤 96
徳田秋声 99
北原白秋と斎藤茂吉 100
日華戦争の勃発と文化統制 102
戦争文学 105
戦争下の芸術的抵抗 106
プロレタリア文学者たちの抵抗 112
昭和の大衆文学 116
太平洋戦争の開戦と文学報国会 118
戦争下の文学 121
「東方の門」と「細雪」 122
抵抗の文学 123
戦争末期 126
戦後の文学 128
無頼派（新戯作派）の作家たち 130
民主主義文学の出発 132
批評家の活躍 134
アプレーゲールの文学 136
風俗小説の流行 139
中堅の作家と批評家 141
朝鮮戦争の時期 144
チャタレイ事件 146
講和条約の前後 147
講和条約以後 149
講和条約以後の新人たち 154
昭和三十年代の新人 156
昭和三十年代の文壇 158
昭和四十年代のはじまり 160
付録
近代から現代へ
年表
索引

大正から昭和へ

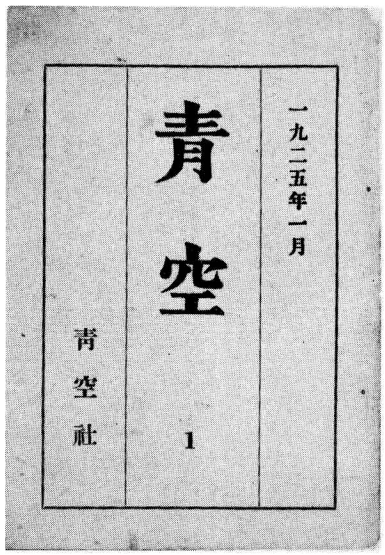
日本文学史における「昭和の文学」の歴史は、大正後期に明治以来の既成リアリズム文学打倒を目ざしておこったアヴァンーギャルド（前衛芸術）の詩人たち、プロレタリア文学・新感覚派の文学運動によって開かれる。大正十二年の関東大震火災を経て、若い文学世代たちは文壇の久しい沈滞を破るべく、大胆な冒険と実験に進み出ていった。「疾風怒濤」の時代がはじまった。また大震火災を境に、「大衆文化」の新しい段階がはじまる。

それから以後、一九三〇年代の戦争とファシズムの時代を経て太平洋戦争の終結。さらに「戦後の文学」に至るまで、やがて½世紀にわたろうとする「昭和の文学」の複雑多彩な展開の跡をたどり、日本の「二十世紀文学」ともいうべき文学的実質がいかに成立したか、また、どう挫折したか、どんな結実を生みだしたか等を以下にたどってみよう。

そこには困難な激動期と戦争の時代に生きた文学者たちのさまざまな息吹きが伝わってくる。

大正十三年十二月

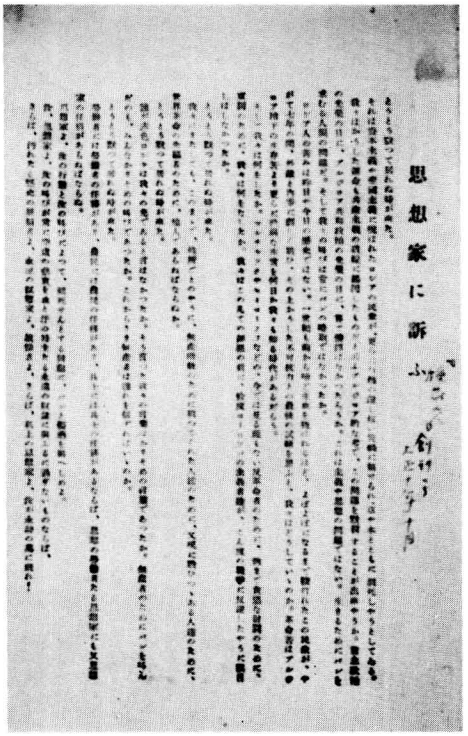
大正十四年三月



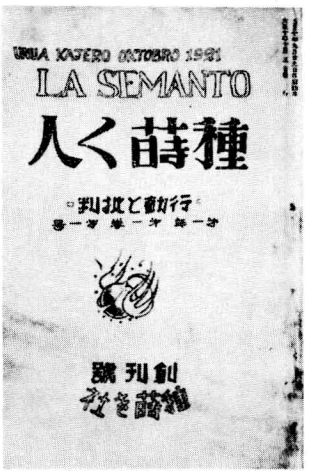
大正十四年一月

大正十五年四月

プロレタリア文学の出発
――『種蒔く人』の時代――



『種蒔く人』第2次創刊号に載った題言



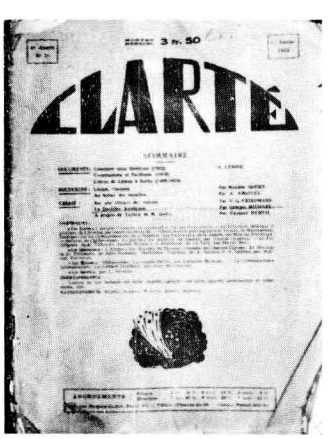
第2次創刊号　大正10年10月

第1次創刊号　大正10年2月

『種蒔く人』同人とその周辺の人々

前列右から細井和喜蔵・青野季吉・時国利一・島田普作・佐野文夫・市川正一・宮地嘉六、後列右から前田河広一郎、ひとりおいて藤森成吉・小川未明、ひとりおいて秋田雨雀、ひとりおいて平林初之輔・堺利彦・小牧近江・佐々木孝丸。大正十一、二年頃

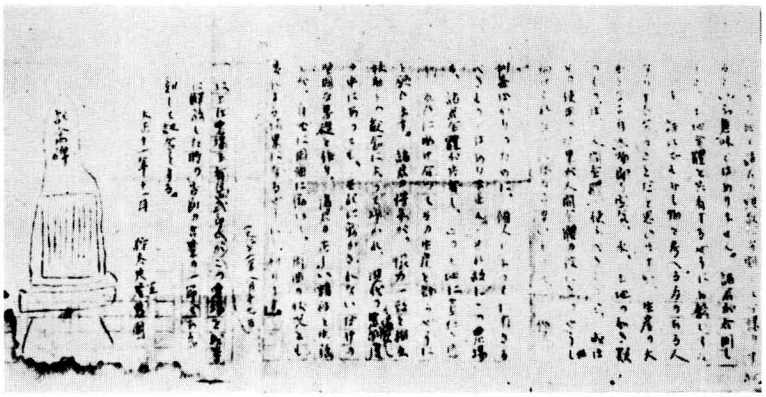
『種蒔く人』同人の寄せ書　昭和36年



フランスにおけるクラルテ運動の機関誌

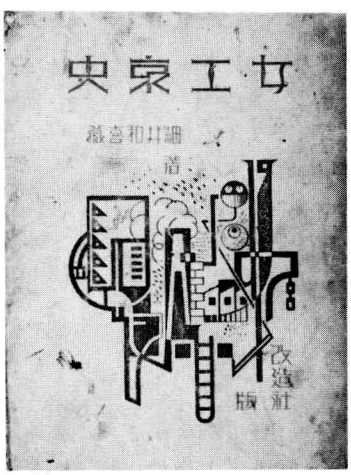
右のバルビュスの作品とともに『種蒔く人』の創刊に大きな影響を与えた

武郎書の扁額



大正十一年、有島武郎が所有の北海道狩太農園を解放した際の趣意書の写し

大正十年二月、フランスから帰朝して間もない小牧近江によって、反戦・平和のためのクラルテ運動を目ざした雑誌『種蒔く人』が秋田県土崎港で創刊された。十八ページ、二百部だけ印刷されたこの小雑誌は、十月から東京でもう一度創刊され、金子洋文・前田河広一郎・平林初之輔・村松正俊・柳瀬正夢らが加わって進歩的な思想・文学の統一戦線をつくり、はなばなしい活動を展開した。東京版『種蒔く人』によって日本のプロレタリア文学運動がはじまった。

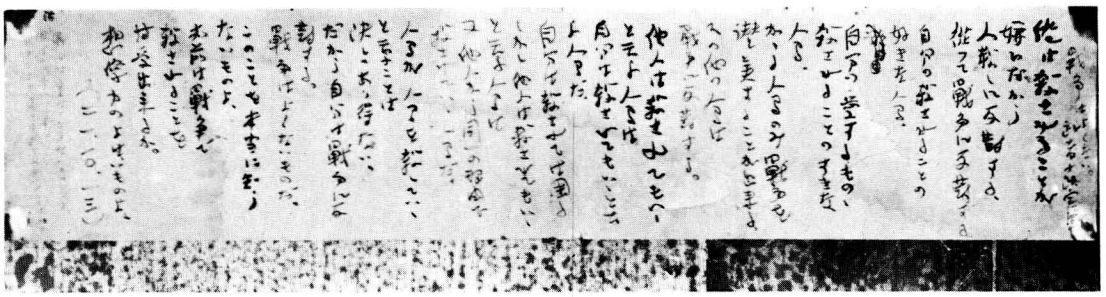


大正十四年七月刊

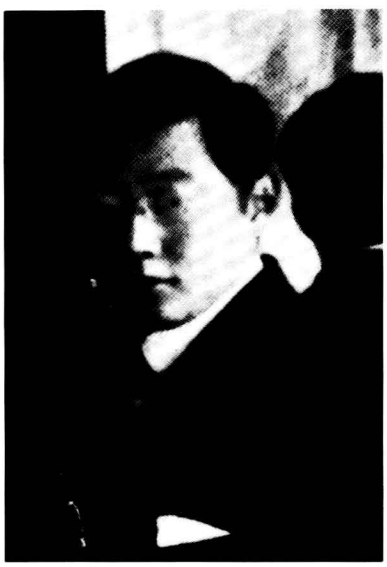
大正十一年三月刊

大正十五年刊

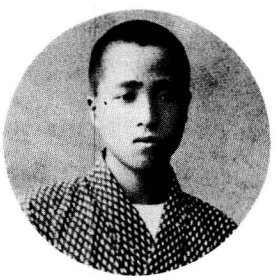
前田河広一郎の第一創作集　大正十一年一月刊



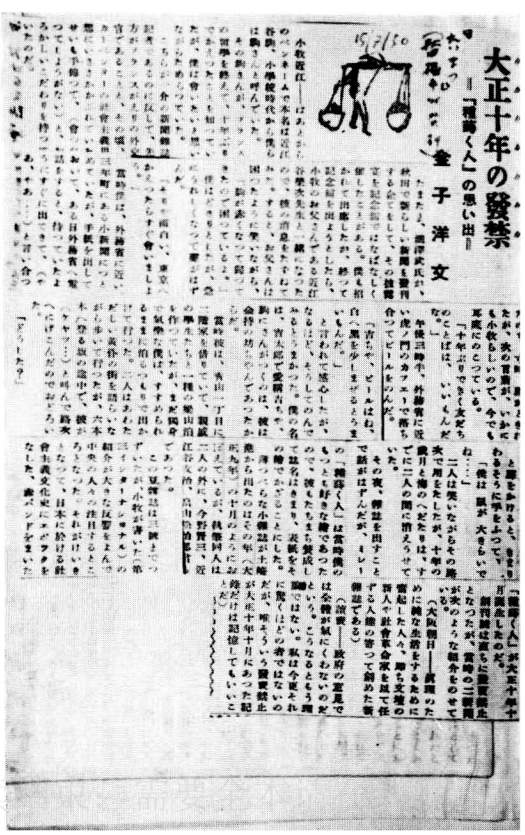
武者小路実篤「戦争はよくない」原稿　『種蒔く人』に掲載された



小牧近江　大正八年、フランス留学時代



平林初之輔



大正十年の發禁
―『種蒔く人』の思い出―
金子洋文

秋田から発行の『たいまつ』切抜き　橋爪健のスクラップブックより

大正十一年一月

试读，需要全本请在 www.ertongbook.com

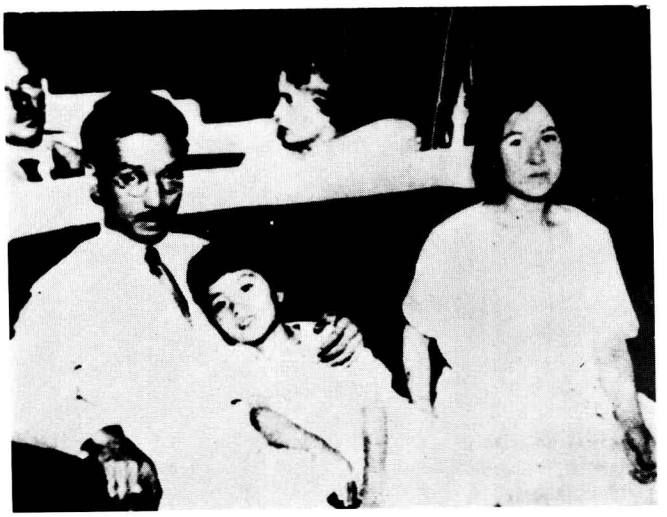
関東大震火災直後の銀座　（大正12年９月）

関東大震火災と文学者

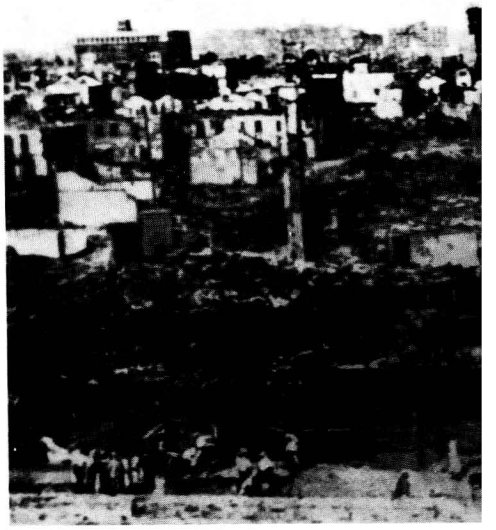
大正12年９月１日，関東大震災がおこった。東京・横浜両市 4,000,000 市民は，地獄の底につきおとされた。 12ないし15㎝という震幅の広い未曽有の激震で，直後140か所から火災がおこり，東京は猛火につつまれ，焦土と化した。死者91,000人，被害家屋 527,000 戸。まだ業火がおさまらない３日，東京・神奈川に戒厳令がしかれ，大混乱のさなかに多くの朝鮮人が殺された。５日，労働文学のすぐれた作家・劇作家平沢計七ら南葛労働会の10名が，亀戸警察で，16日にはアナーキスト大杉栄が妻伊藤野枝，甥の橘宗一とともに陸軍憲兵太尉甘粕正彦によって殺された。

帝都大震災一覧

アナーキストの詩人陀田勘助の日記　大正14年９月14日



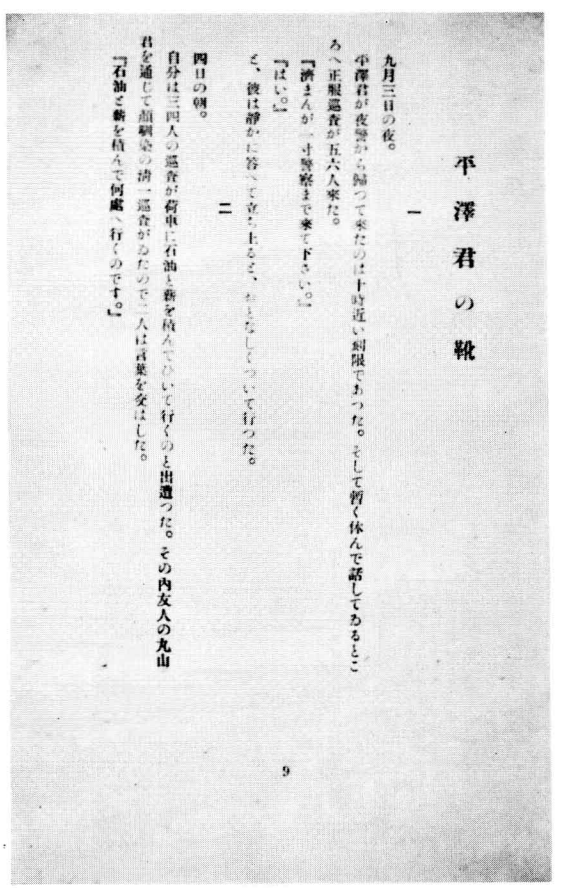
大杉栄と伊藤野枝　震災の混乱の中で官権の手で虐殺された



遺稿集　大正十三年四月刊

震災の際虐殺された平沢計七についての金子洋文の記録

（『種蒔き雑記』13年1月）



平澤君の靴

一

九月三日の夜。

平澤君が夜警から帰つて来たのは十時近い刻限であつた。そして暫く休んで話してあるところへ正服巡査が五六人来た。

『清さんが一寸警察まで来て下さい。』

『はい。』

と、彼は静かに答へて立ち上ると、おとなしくついて行つた。

二

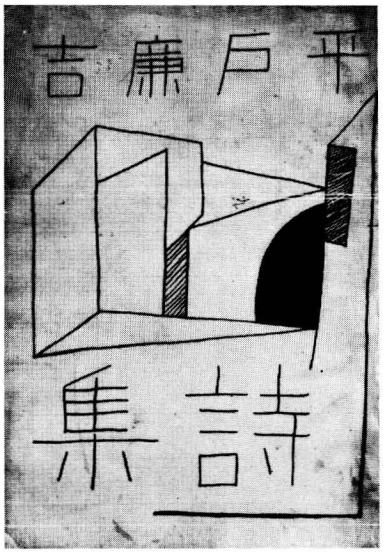
四日の朝。

自分は三四人の巡査が荷車に石油と薪を積んでひいて行くのと出遇つた。その内友人の丸山君を通じて顔馴染の清一巡査がゐたので二人は言葉を交はした。

『石油と薪を積んで何處へ行くのです。』

9

『種蒔き雑記』から――フランツ＝マズレエルの版画



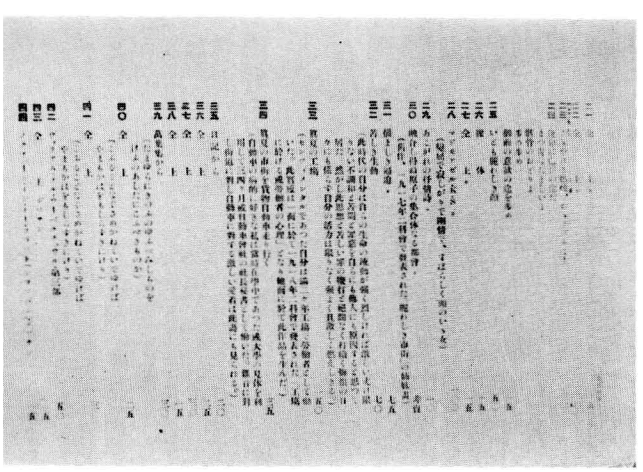
没後、昭和六年十二月に刊行

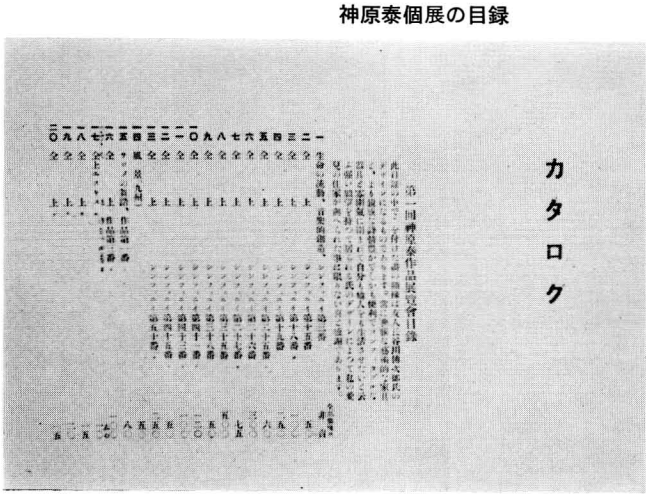
右は日本最初のアヴァン－ギャルド宣言書で、大正九年十月、神原泰個展の際に発表された　アクションの会の展覧会は大正十二年十月

高橋新吉　大正十二年二月刊

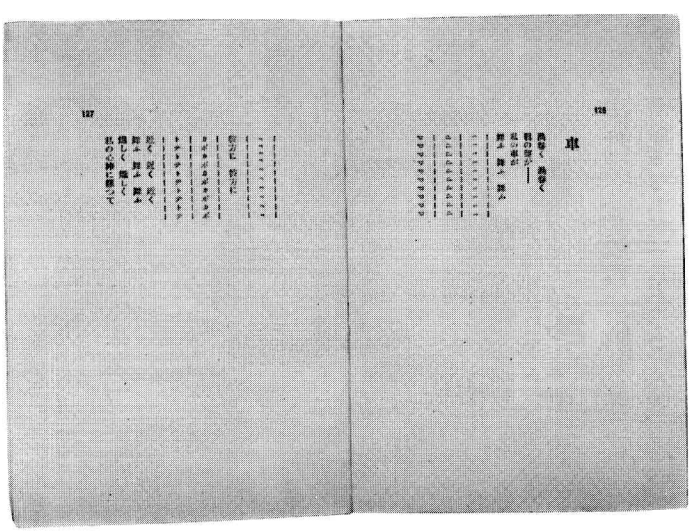
アヴァン－ギャルドの芸術

神原泰個展の目録





古賀春江「収穫」（上）と中川紀元「耶蘇誕生」（下）
ともにアクション第1回展に出品された



『陀田勘助詩集』

大正十一年四月

大正十二年一月

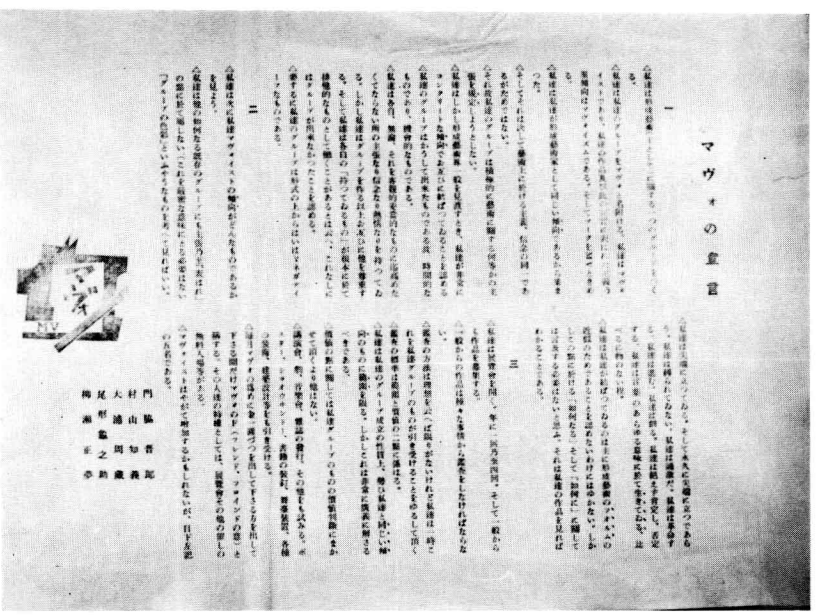
大正十二年六月

大正十三年十

『マヴォ』の扉

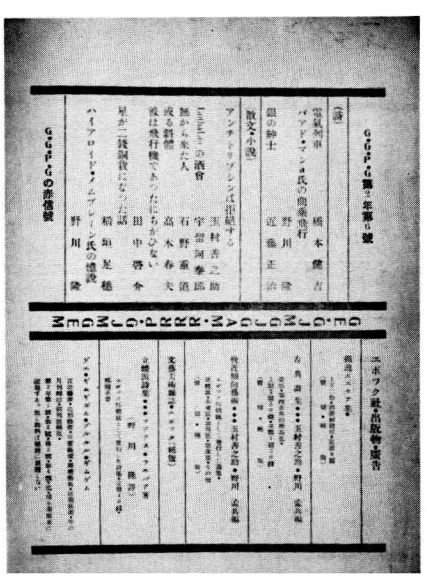
創刊号　大正13年7月

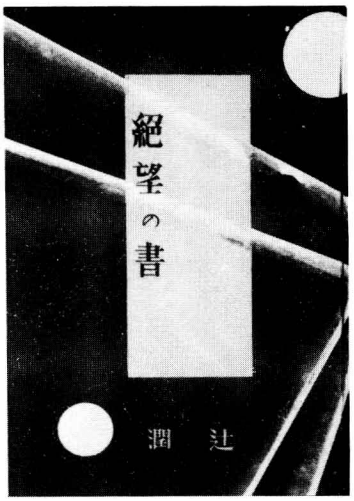
大正九年十月、神原泰個展の際、造型美術と詩の領域でいち早く実験と模作をはじめていた神原は「第一回宣言書」を発表して、いっさいの芸術上の偶像崇拝を否定するアヴァン－ギャルドの宣言を行なった。次いで壺井繁治・岡本潤・萩原恭次郎・川崎長太郎らアナーキストの詩人たちが雑誌『赤と黒』を創刊、資本



雑誌『ゲエ・ギムギガム・プルルル・ギムゲム』の目次

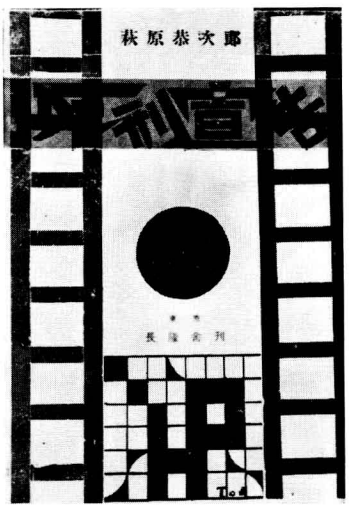
『悍馬』創刊号　大正13年2月





昭和5年11月刊

村山知義ら訳　大正14年4月刊



大正14年10月刊

主義の人間破壊に対する憎悪と抗議をこめたダダイズムの運動を展開、さらに大正十二年七月には村山知義・柳瀬正夢・萩原らの前衛芸術グループ「マヴォ」が結成されて、多彩で活発な旧芸術破壊の運動がくりひろげられた。横光利一が関東大震災前後の〈未来派、立体派、表現派、ダダイズム、象徴派、構成派、如実派のある一部、これらは総て自分は新感覚派に属するもの〉（「感覚活動」）と思うと述べているように、第一次大戦後のヨーロッパの「戦後文学」が盛んに日本に持ちこまれ、新感覚派にも強い影響をあたえた。ゲーリングの「海戦」は、大正十三年六月、築地小劇場の第一回公演で土方与志（ひじかたよし）によって演出されたドイツ表現派の代表作。

東郷青児『パラソルさせる女』　大正五年作
大正期の未来派を代表する作品のひとつ

ドイツから帰朝直後の村山知義の舞踊

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com